

聖書：エペソ人への手紙5章21～33節

説教：キリストと教会

はじめに

妻の立場にある方々は、「自分の夫に従いなさい」というところを読んで強い抵抗を感じたのではないのでしょうか。パウロはいつも厳しいことを言うけれど、今日のところは特に聞きたくない。そんなふうに耳を塞ぎたくなったかもしれない。いつも言いますが、聖書は私たちを厳しく責め立てるために書かれているはずはありません。であれば、このみことばをどう理解すべきなのか。これが今日の一つのテーマとなります。そしてもう一つは、皆さんはすでにお気づきだと思いますが、パウロは夫と妻のことを言いながら、同時にキリストと教会の関係をことを並行させながら書いています。どうしてこんな書き方をするのか。このふたつのことについて考えていきます。

1 教会と夫婦

1) キリストと教会

そこでまず教会のことから見て、その次に夫婦のことというふうに分けて考えてみます。キリストと教会の関係について語っている所を抜き書きするとこうなる。23節。「キリストが教会のかしらであり、ご自分がそのからだの救い主であるように。」24節。「教会がキリストに従うように。」25節。「キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように。」29節。「いまだかつて自分の身を憎んだ人はいません。むしろ、それを養い育てます。キリストも教会に対してそのようになさるのです。」

ひとことでいえば、キリストが教会を愛してくださるので、教会はキリストに従う。これ以上説明がいらないくらいなにも難しいことは書いていない。

2) 妻

では次に妻と夫のことを見ていきますが、先にでてくるのが妻のほうです。22節と24節。「夫に従いなさい。」33節。「妻もまた、自分の夫を敬いなさい。」妻に関して言えばこの二つです。ですが、先ほども言ったように素直には受けとめられない。非常に高いハードルに聞こえます。

3) 夫

では夫に対してはどうでしょうか。25節と33節。「あなたがたも妻を愛しなさい。」28節。

「自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。」夫である方はどう感じましたか。そんなに厳しいというようには感じないのではありませんか。いまはどうかは別として、少なくとも結婚するときは妻を愛していたはずですから。

こうして比べてみると、夫の方はやさしくて、妻には従えと言われている。そんなふうに聞こえたのではないか。日本には、一昔前まで妻は夫に従えという文化がありました。二千年前のイスラエルも同じだったのか。聖書は男性優位という性差別丸出しの時代遅れの書物なののでしょうか。そんなはずはありません。ではどう理解したらいいのでしょうか。

2 結婚

1) 恐れる／敬う

そこでまた元に戻りまして、妻に対して言われているところをもう少し詳しく見ていきます。21、22節。「キリストを恐れて、互に従い合いなさい。妻たちよ。主に従うように、自分の夫に従いなさい。」33節後半。「妻もまた、自分の夫を敬いなさい。」ここで翻訳の話をしてしまつて恐縮なのですが、「キリストを恐れて」の「恐れる」と、「敬う」は原文では同じことばが使われているのです。キリストを敬い恐れて従うように、夫を敬い恐れて従う。こんな意味になる。

これを聞いて皆さんはこう思ったのではないか。“どんなダメな夫でも敬うのか。自分と意見が違ふ夫でも文句も言わず奴隷のように従うのか。”

2) 一体となる

もちろん妻は、夫の奴隷ではありません。ちょうど31節に創世記からの引用がありますが、これは結婚の意味について神ご自身が説明してくださっている箇所です。そこには「二人は結ばれて、一体となる」とあります。もし結婚が主人と奴隷という関係であるなら、そこには信頼などありませんから、二人が結ばれて一体となることなどできない。ということは、パウロは、夫と妻が結ばれて一体となるという前提に立ちながら、「妻は夫に従いなさい」と言っていることになる。

3) 結婚のモデル

それがどのようなことか、これから見ていきますが、その前に皆さんが結婚したときのことを思い出してください。そのときどんなことを感じていたか。私の場合はこうでした。結婚の日取りが決まり結婚式の準備をしていくのですが、肝心の結婚とはどういうことかについてだれも教えてくれないう。内心、戸惑いました。それで苦し紛れに理想の夫婦をモデルにして、あんな家庭を築きたいという目標にした。でも、モデルとなった家族に欠点があるし、自分にも弱さがある。結局、あるとき夫婦関係の危機を迎えてしまったわけです。やはり神ご自身から夫婦のモデルを教えてもらわないといけない。いまはそう思える。ではそのモデルはどこにあるのでしょうか。

この箇所にはなんども「なにになにのように」という表現があることにお気づきだと思います。24節。「教会がキリストに従うように、妻もすべてにおいて夫に従いなさい。」キリストと教会が、夫婦のモデルだということです。教会がキリストに従う。それをモデルにして妻が夫に従いなさいというわけです。夫婦のことと教会のことが並行して語られているのは、そんな理由からです。でも、これだけでは妻は納得しないはずです。もっと突っ込んだ説明が必要です。

3 キリストの愛

1) 夫が妻を愛するなら

ここから核心に迫っていきます。ではどうして教会はキリストに従うのでしょうか。その理由は25節に書いてあります。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。」

今日の箇所を、妻は妻だけのこと、夫は夫だけのことというように分けて読んでしまいがちですが、そうすると「厳しい、できない」という話になってしまう。ここはむしろ、真っ先に夫のことから読んだほうがよい。夫がどのように妻を愛するのか。まずそのことが先なのです。

それで夫のことについては、聖書にこうあります。「キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。」夫がどのように妻を愛するか。そのモデルはキリストです。ことばで「愛している」というのは簡単。妻は、態度で示してもらわないと信じません。キリストはどうしたか。教会のためにご自分を献げることによって、愛を示してくださいました。では夫はどうするか。キリストがモデルです

から、夫も、妻のために自分を献げなければならない。妻のためにいのちを捨てる覚悟をもてということです。妻を愛するということはそういうことだと教えている。もし夫がそんなふうに愛を示してくれたら、妻はどうなるのでしょうか。

2) 従わずにはいられない

ここで話しが飛ぶようですが、地下鉄に乗るとドアのところにお米の公告ポスターが貼ってあって、大人の男性がご飯を食べている写真と一緒にこう書いてある。「ああ、食べらさる。」これは北海道弁ですが実にすばらしいと思います。だれかに命令されたわけでも、努力したわけでもない。とにかくご飯がおいしくて、気がついたらいっぱい食べていた。そんな意味です。キリストの愛はまさにこれです。キリストの愛があまりにもすばらしいので、気がついたらこの方に従っている。だれから言われなくても、自然に敬う気持ちがわいてくる。それと同じように、もし夫が妻のためにいのちを捨てる覚悟があるとわかったら、妻も自然に従いたくなる。こうして夫と妻は結ばれて一体となっていくのです。

最初ここを読んだときは、妻は夫の奴隷になれと言われているのか。不公平だと思った。ところが話しは反対で、実は夫の方がだんぜん厳しいことを言われているのです。聖書には、男女平等という思想はありません。ある意味では不公平だと言ってもよい。そもそも、神ご自身が罪人のためにいのちを捨ててくださる。これ以上の不公平な話はありません。

3) すでに聖とされている家族

最後に、まだ救われていない夫のことで悩んでいる姉妹のためにお話しします。諦める必要はありません。聖書にこうあるからです。コリント人への手紙7章14節。「なぜなら、信者でない夫は妻によって聖なるものとされており、また、信者でない妻も信者である夫によって聖なるものとされているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れていることになりますが、実際には聖なるものです。」信仰告白をしていなくても、あなたがクリスチャンであることで、神によってすでに家族は聖とされている。神に近いものとされているということです。神はあなたの家族を特別に覚えておられるということです。

ときには、夫はもう救われないと、諦めたくなることもあるかもしれません。しかしキリストはどうされたのでしょうか。私たちがまだ神に反抗し

て罪人であったとき、キリストはそんな私たちでも愛し、いのちを捨ててくださったのではないですか。いまはまだ信仰告白されていなくても、キリストはみなさんの夫のためにもいのちを捨ててくださったのです。であれば、私たちは諦めるべきではない。神はあなただけでない、あなたの家族をも顧みてくださっています。

私たちは、このキリストに従ってまいりたいと願います。